新潮文庫

鏡

源氏鶏太著

新潮社

鏡

定価 110 円

新潮文庫

昭和三十五年八月三十一日 発行
昭和三十七年七月三十日 六刷

著者 源氏鶏太

東京都新宿区矢来町七一
発行者 佐藤亮一

東京都新宿区矢来町七一
発行所 株式会社 新潮社
電話東京(341)代表(七一一一)(九六一〇)(一五)
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。 ㊞

印刷・図書印刷株式会社　製本・憲専堂製本所
© Printed in Japan

新潮文庫

鏡

源氏鶏太著

新潮社版

1419

目次

最初の接吻……七
二人の新入社員……二七
地下室の酒場……四六
愛する……六九
中年の紳士……八九
姫鏡台……一一〇
悪い情報……一三〇
福の神……一五一
大胆不敵……一七二

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

岩手山……一九三
母の帯……二二四
東京の雨……二三五
母と義母……二五五
ダイス……二七六

解説　十返肇

鏡

最初の接吻

一

その日、私は、日記にこう書いた。

「……私は、父を憎んでいる。義母を憎んでいる。近頃、父と義母を憎むことが、まるで、私の生甲斐のようになってしまった。私は、恐ろしい娘なのだろうか……。」

その夜、私は、家に無断で、十二時過ぎに帰ったのだった。私は、すこし、酔っていた。はじめて、彼に、唇を許したのも、その夜であった。彼の転勤は、明日に迫っていた。私たちは、彼の提案で、二人っきりの送別会をしたのである。

早春の夜の、寂とした神宮外苑を歩きながら、彼は、しきりに、今、東京を離れたくないのだ、といっていた。君を残して、都落ちをすることは、断腸の思いがする、といっていた。それから、自分を転勤させたのは、あの課長の策動で、課長は、君を愛しているからなんだ、と激しい口調でいった。

私は、彼の歩調に合わせて歩きながら、黙って聞いていた。そんな私の態度を、彼は、不満に思っているようだった。しかし、私に、何がいえたろうか。

私自身、彼を愛しているのかどうか、よく、わからない。好きなのに違いない。だからこそ、

こんな夜更けに、二人っきりで歩いているのだ。しかし、愛していることと、好きということとは違うのだ。同時に、何人もの人を好きになることは出来るが、しかし、愛することは出来ない、という言葉を、昔、どこかで読んだような気がする。なるほどと思ったが、近頃になって、嘘だ、と思うようになってしまった。男のことは知らない。女の私は、自分の心の中を覗いて、同時に、何人もの人を愛することが出来るような気がしている。しかし、大切なことは、誰をいちばん愛し、そして、誰からいちばん愛されているか、ということでなかろうか。

かりに、私が、彼を愛しているとしても、いちばん愛しているのだと、いい切れる自信はなかった。また、彼から、いちばん愛されているのだ、という自信もない。このあと、もっと愛することの出来る人が、現われて来そうな気もする。そのくせ、彼がいなくなってからの会社は、そこだけがポカッと穴が空いて、いつも、風が通り抜けているように、きっと淋しいに違いなかろう、と感じていた。もし、その淋しさが、胸をえぐられるような切なさで、私に迫って来たら、本当に彼を愛していたことになる。だから、すべては、彼が、去ってからわかることなのだ。私は、そういうことを考えていたのである。

「何故、黙っているんだ。」

彼は、歩みをとめて、私の顔を覗き込むように見た。

「だって、どういっていいか、自分でも、わからないんですもの。」

「君は、今後、課長なんか、問題にするな。」

「しないわ、多分……。」

「多分？　どうして、決して、といってくれないんだ。」
私は、笑いながら、
「では、決して。」と、彼の気のすむように答えた。
彼は、私が、では、といったことが、気にいらないようすだった。
「僕には、君という女、よくわからないんだよ。」
彼は、悲しそうにいった。
「私自身にも、よくわからないんですもの。」
私も、悲しそうにいった。
「ねえ、結婚してくれないか。」
「かまいませんの？」
「僕の家の方で許すか、ということか。」
「いいえ。」
私は、頭を横に振って、
「課長さんの思惑を気にしなくてもいいの、ということよ。」
「課長の思惑？」
彼は、眼を光らせた。
「そうよ。あなたは、さっき、課長さんが、あたしを愛しているから、自分を転勤させるのだ、とおっしゃったでしょう？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「いった。」
「だったら、結婚したりしたら、今後、ますます、睨まれるわよ。」
「かまうもんか。」
「そう……。」
「せめて、結婚の約束だけでもしておいてくれないか。」
「そんな約束、あたしは、まだ、しない方がいい、と思うのよ。」
「逃口上だ。」
「違います。」
私は、彼の顔を見上げながら、きっぱりといった。
彼も私も、さっき、映画館を出てから、彼の行きつけの新橋のおでん屋で、酒を飲んだ。彼は、三合ほど飲んだろう。私も、一合近く飲んだはずである。しかし、私は、気持がしっかりしているつもりだった。頭も冷静だった。
彼は、私の顔を見返していた。その彼の顔に、何か、掠め去るものがあった。彼は、突然に、私の肩に右手をかけた。
「いいだろう？」
私は、近づいてくる彼の唇を避けながらいった。
「いけないわ、そんなこと。」
「頼む。安心して行きたいんだ。」

「いやよ。」
「……。」
煙草臭い彼の唇が、私のそれをおおった。
後で思うと、私は、彼に対して、どれほどの抵抗もしなかったようだ。やはり、酔っていたのだろうか。それとも、去って行く彼に対して、唇ぐらいあたえてもいいという思いが、私の胸の奥にひそんでいたのだろうか。しかし、その接吻は、私が、二十三歳になって、はじめてのものだったのである。
「ありがとう。」
彼がいった。私は、黙っていた。
「憤っているの？」
「……。」
「後悔してるの？」
「……。」
かりに、私が、憤っている、と答えたら、彼は、どうするつもりだろうか。後悔している、と答えたら、あやまるつもりだろうか。しかし、私は、憤っても、後悔しても、いなかった。嬉しくもなかった。何か、淋しいだけだった。やっぱり、私は、彼を愛してはいなかったのだろうか。まだ、わからない。しかし、最初の接吻のあとで、相手を、愛していなかったのかも知れない、というような疑いをいだかなければならぬ自分を悲しいことに思っていた。

二

私は、それまで、無断で、十二時過ぎに帰ったことはなかった。父も義母も、だから、心配していたに違いない。

「今頃まで、どこを、ウロウロしていたんだ。」

父は、私の顔を見ると、いきなり、叱りつけるようにいった。それから、私の身辺を探るように見た。私は、すぐ、あやまるべきであったろう。しかし、その気には、なれなかった。

横になった父の腰をもんでいる義母の指は、白くて、しなやかだった。三十六歳。まだ、身体の線が奇麗で、いっしょに歩いていると、私の姉のように見られる。美しさも、私以上だろう。父は、四十九歳なのである。しかも、近頃、仕事の方がうまくゆかないのと、身体の加減が悪いのとで、五十五、六歳に見える。そうして、父と義母は、夫婦というより、親娘に見える。

私は、白い眼で、翡翠の指輪をはめた義母の指の動きを眺めていた。亡くなった母のことが、どうしても、思い出させられるのである。母は、私の十五歳のときに亡くなった。

四年たって、父は、義母と再婚した。

その四年間、私たちの世話をしてくれていたのは、女中の杉だった。杉は、母が生きていた頃から、私の家にいたのである。いわば忠義者だった。私を、本当に可愛がってくれた。私も、好きだった。

父が、義母の良子と再婚するとき、杉にヒマを出した。

その直前のある夜、私は、父の部屋から、杉のわめき声を聞いた。それをおさえる父の声も聞えていた。私には、いつもは、父を大事にする杉が、どうして、あんな声を出すのかわからなかった。

しかし、翌日、杉は、私が、会社へ行っている間に、田舎へ帰ってしまった。

義母は、私に、まぶしいくらい、美しい人に思われた。私にやさしかった。やさしいというよりも気をつかっているのだ。しかし、私は、その頃から、ふたたび、亡くなった母を、ひとしお思い出すようになっていた。父と義母が、別々にいるときはまだしもだが、二人がいっしょにいる姿を見ることが、嫌でたまらなかった。

結婚の当座、父と義母は、よく、揃って出かけた。父は、急に、若返ったようであった。五度に一度は、義母が、私にいった。

「京子さんも、いっしょに行かない？」

私は、いつでも、笑顔でことわった。

「お家で、本を読んでいる方が、楽しいんです。」

「そう。じゃア、この次にね。」

二人がいなくなったあと、私は、家の中をのびのびと歩きまわった。何度も深呼吸をした。が、結局は、自分の部屋にこもって、亡くなった母の写真を眺めるのだった。

私は、義母が来てから、母の写真を、机の上に置くようになった。父が、それを見つけていった。

「こんどのお義母さんに悪いからよした方がいい。」
「はい。」
私は、一週間、それを実行した。が、そのあとで、別の写真をアルバムからはがして、机の上に置いた。前の写真は、母ひとりのものだった。こんどの写真は、父と母と私の三人が、上野の動物園へ行ったときのものだった。義母は、毎日、それに気がついているはずなのに、何もいわなかった。私は、いい気味だった。数日後、父が、義母の前で、私を叱りつけた。
「京子は、また、亡くなった弘子の写真を出しているそうだが、あれほどいかん、といったのにわからないのか。」
「弘子ではありません。私のお母さんです。」
「そんなことは、どうでもいい。明日から、しまっておきなさい。」
「嫌です。」
「何？」
父は、私を、睨みつけた。義母が、横からいった。
「まア、いいじゃアありませんか。」
私は、義母の顔を見た。義母は、ニコッとして、重ねていった。
「本当にいいのよ。無理ないわね。」
そのとき、私は、義母の嘘を、はっきり、感じた。どうして、父といっしょになって、私を、叱ってくれないのだろうか。いい気持がしないから、といってくれないのだ。私は、心の底で、

そういってほしかったのである。

（ママ母だから、本当の愛情がないんだわ）

私は、そうときめてしまった。それなら、もっともっと、意地悪をしてやるから——。しかし、この心は、裏を返せば、義母からも可愛がられたいという、亡くなった母を慕う心とは別の、しかし、私としては、矛盾の感じられぬ気持だった。

私は、そういうとき、女中の杉のことを思い出すのを常としていた。父と私と杉の三人で暮していた頃の楽しさが懐しかった。あの頃の父は、今の何倍か、やさしかった。私も、平気で、甘えられた。甘えられることを、父は、よろこんでいた。が、今の父は、義母に、絶えず、気をつかっている。今までは、百パーセント、私の父であった。が、今では、十パーセントぐらいに減ってしまっている。そして、私から、父の九十パーセントを奪った義母に、父が、どうして、そんなにも気をつかわなければならぬのか、私には、理解出来なかった。そんなに愛しているのか、と腹が立った。遠い記憶だけれども、父は、亡くなった母に対しては、むしろ、暴君に近かったのである。いっしょに外出することなど、めったになかった。

新しい女中は、杉とは、比較にもならぬほど、無精者だった。しょっちゅう、叱られていた。五カ月目に、自分からヒマを取って帰った。次の女中がくるまでの一カ月間、義母は、台所仕事から掃除まで、一切をしなければならなかった。見かねて、というよりも、こういうチャンスにこそ、あの杉を、もう一度、この家に呼び戻したいと、私は、父と義母の前でいった。

「杉さんが、まだ、遊んでいるんだったら、来て貰ったらいいのに。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com